

五歳児の字への興味と個人差

——一年間の記録から——

多田和子



はじめに

最近の幼児のまわりには、テレビや絵本など、生活の広範囲にわたって、文字がはいりこみ、自然に文字に対する関心が高まっているといえよう。私の園は農村地区の幼児が三分の二、団地および一般のサラリーマン地区の幼児が三分の一で、幼児の生活環境にも多少左右されるだろうが、日常の生活をみていると、自然に文字が使われ、遊びがいつそう発展することも、しばしばみられる。そこで一年間の幼児の遊びの姿を追って、文字に対する興味をとらえてみたいと思う。

数字による記号で、自分の場所をみわけるとともに、
名札の文字にも興味をもつ

私の園では、靴箱、帽子かけ、鞆かけ、ロッカーなど個人用のものに、組のしるしのゆりの花の貼紙の中に、数字で、その幼児の番号を記入したものを貼っておくことになっている。入園式の日は、母親がしてくれるが、二日目からは、教師がひとりひとりの幼児を出迎えながら、わからない幼児には、その場所をおしえることになる。大部分の幼児は、自分の場所へ、もちものを処理することができたが、11番のN夫と、39番のA子は毎朝間違えて友だちの場所を使っている。A子は39番を36番と間違え、N夫は、全然無関心で、どこへでも勝手に使用している。

でも一般的にみて、数字を記号としてみて、その記号のところへ持物をおくことは、それほど困難はないようである。また二、三日もすると、「あんななんという名前」と、級の友だちに、話しかけたり、お互にひらがなで名前の書いてある名札をみ

せあつて、自己紹介をしている姿をみかける。自分の名前が、文字で示されていることに興味をもっているようだ。

身近にあるものを共通のサインとして遊びを発展させる

例一 四月二十七日 つみ木であそぶ

男児が、つみ木で電車を作つてあそぶ。最初はつみ木だけで、あそんでいたが、椅子も加えて大きい電車になった。そこで「ひかり号」にしようといつて、いっそう遊びが活気づいてきた。まだこの時期では、なかなか友だちの仲間にはいらない幼児がいるが、楽しそうに遊んでいるのを見て、女児も「のせて」といって参加する。最初は、切符も何もなく、ただのせていたが、やがてH夫が、「切符がいるよ。これにしようか」と色板をもつてくる。色板が切符として、参加者全員に通用する。「切符ちょうだい。切符ちょうだい」といって、色板で乗つてあそぶ。

例二 五月十三日 レストランごっこ

お家ごっこをしていたS子たちは、「レストランごっこをしよう」ということになってお店づくりをはじめた。そばでみていた幼児らが、客になって、たのしそうに遊んでいたS子は、絵本をくばりながら、「ごちそうを注文してください」という。絵本がメニューになっていろいろらしい。客になっている幼児も、けっこうそれをみていろいろ注文をしている。「あとでお金をはらつてく

ださいよ」といわれて、「あ！ お金いるんやつた」といせいで、牛乳のふたをもつてきて払う。

このようなことは、どこでもよくみられることであるが、この例は遊びを発展させるために、色板が切符として、また牛乳びんのふたがお金として、幼児たちの共通のサインに使用された例であり、ごっこを通して幼児の発達にともなつて、このようなサインは、いろいろに変化する。このことはやがて、文字というより高度の記号に対する理解の基礎として役立つであろう。

当番表の文字に興味をもつ

五月七日

おべんどうが始まったので、当番表を作る。ひとりひとりが書いた自分の顔の絵の横に、教師がひらがなで名前を書いてやり、日めくりのようにめくつていって、つぎの当番に引継ぐようにする。グループにすぎない名前をつけて、それぞれしるしをつける。「こんどのパンどぐみのお当番はだれ」といって名前をよんだり、「わたしのこれよ」と得意そうにみせあう。これは自分のかいた顔と文字による名前の一致であるが、絵による記号と文字による記号との対応ということになろう。あまり抵抗はないので、幼児は興味をもつたようである。

文字を読むことに興味はあつても語や文はわからない

五月二十日 おべんどうの後で、「きょうは、静かに絵本をみましょうね」といって絵本をみながら食後の休息をとらせる。グループに数冊ずつ絵本をくばり、自分のすきなものをえらばせる。どの程度絵本がみられるだろうと思つて巡回する。

I子は団地の子で、かなり早くから文字に興味をもち、紙芝居をみるときでも、ずばつと題名を読んでしまう。絵本も一つずつ語でくぎりながら読む。しかしこのような幼児は三、四名で、一字ずつ読む幼児が大半である。一方全然読めないで絵ばかりみている幼児は四、五名、自分の知っている字を拾い出して読んでいる幼児は数名であつた。また読みあやまりは、「○○は」を「わ」と読まずに「は」と読んだり、「へ」を「え」と読んだりしている。よく似た字形の「い↓こ」「こ↓い」「ほ↓は」「ね↓ぬ」「ま↓き」などもよくまちがつて読まれていた。

このようなことから、幼児は文字を読むことはできるが、文を読んだり、語を読んだりするのはもっとあとのもので、いろいろな経験を十分にしてからでないといふ無理であることがわかつた。

文字をばらばらにかく

六月十五日 絵をかいたあとで、「その画紙へ自分の名前が書け

るひとは、書いてくださいね」といったら、「僕書ける。わたしも書ける」といって書いた。順序よく書ける幼児もあれば、あいた空間のところから書きはじめ、上下を考へていないので、判読しなければならぬのもあつて、順序よく書くということがわからない幼児もあつた。

濁音がかけないので、幼児の名前の頭文字で代用させる

六月二十日 雨降りが続いて、室内遊びが多くなつた。昨日に引続いてT夫らがボーリングあそびをはじめた。やがて得点をつけて競争しようということになり、どこに得点を書こうかと相談にくる。そこで小黒板をだしてやると、B夫が、「僕がかきやになつたるわ」といって名前を書きだしたが、友だちの名前が書けない。

はじめに「ひろしのろろ」はどうやった、しげおの「げ」はどう書くの」と尋ねていたが、「ええわ、一つだけ書いておくわ」といって頭文字だけ書く。得点を○で書いて最後にそれをよせている。字の書けない幼児もいてM夫やB夫が書いていくのに満足している。合計得点のところでは器用に逆向きに数字を書く。「ああそれ反対の字や」とT夫が指摘して、「こうかくの」と、教えている。

このように幼児たちは、名前に濁音があるため全部書けないの

で、その幼児の頭文字を使って、記号としてその幼児名を示し満足している。これは幼児の生活の知恵とはいえ興味がある。つまりコミュニケーションの手段としての文字の本当の意味を幼児は直観的に知っているのかも知れない。

遊びの必要により字を書く

七月十二日 もちよった空瓶で色水を作って遊ぶ。はじめは、ひとりひとり色が水を作ったのしんでいたが、やがて三、四人のグループでの売買ごっこがはじまった。店が二ヶ所でき、A子は部屋から紙とマジックインクをもってきて、「いちごじゅーす100えん」と書いた。C子もそれをまねて「こーひ100えん」と書く。「おれんじじゅーす」「ばななじゅーす」もできて店やらしくなる。部屋にいた幼児らが、牛乳瓶のふたのお金をもって買いく。お金の裏側に10とか100とか書いてある幼児もいた。このように遊びの中で字が使用され、お金もこれまでは牛乳瓶のふただけだったのが、10や100と数字を書くことにより、お金の価値づけができ、より現実化された遊びへと発展していくことになる。

この段階では、文字や数字を一つの語ではあるが、書くことによりコミュニケーションの手段としての、記号としての文字のもっている現実的な意味を、遊びを通して幼児なりに興味の対象と

しているといえよう。いわゆる生きた記号として幼児なりに文字を使用しているといえよう。

絵本の内容を想像して読んで楽しむ

九月十二日 外遊びで疲れたD夫らは、絵本コーナーで好きな絵本を選んで、静かにみている。K夫は図鑑に興味をもって、昆虫の名前を一字ずつ指でたどって読み、あとで「せみのようちゅう」と読みなおす。D夫は大体の字が読めて、一きりずつ読んでいる。O夫は、まだ字が読めないのにさかんに口を動かしている。そこで、そと側によって聞いていると、「あひるのおかあさんが、おべんとうをつくってくれたので、みんなが1列になって、お山へえんそくにいくところですよ」と、文字とは全然無関係で、絵がらを想像し、勝手に読んでいる。でも自分の名前にある字は、「か」とか「し」とか探して読んでいる。幼児は字は読めなくても、自分のイメージで絵本をみる。このことの方が、かえて想像性を豊かにできるのではないかとも思われるし、本当の絵本のみかたであろう。つまり絵を通して、コミュニケーションするところが幼児にとっては、文字よりたいせつではないかとも思うのである。

字を書くことにより遊びが発展する

十一月四日 お医者さんごっこ

F子とY子が、ストローに竹ひごを通して「お注射ですよ」といっては、友だちにまねをして遊んでいる。やがて、つみ木の上に腰かけて、「ここが注射する場所です。注射をしにきてください」といって友だちを誘う。教師もいっしょに受けに行く。コップに水をいれて、ちり紙をひたして消毒のまねをし、注射器に水をふくませて、気持よさそうに親指でヒゴを押して注射をする。ばんそう膏の代りにセロテープを貼って、「はいすみましたよ」といっている。側でみていた幼児たちが、「僕もして、わたしもして」といって集まってくるので、「一列に並んでください」とY子が並ばせている。F子が、「ああそうや、注射する人の名前をかかなあかん」と用紙をとりにくる。

適当な大きさに切って与えると、机を一つだしてきて受付にする。F子が受付の人になり、M子、K子が医者と看護婦になる。

F子は、受付で「あなたは、なんという名前ですか」と尋ねて名前を書く。I子は名前をいって両方の腕にしてくださいという。

F子は、「両方の腕ですね」といって、「りよふと」と書く。「お熱はどうですか」「熱はありません」「ねつなし」と書く。

I子は抱いていた赤ちゃんの分も書いてもらって、カルテをもって注射をうける。つぎにY夫がきて、年齢や、名前をいう。

F子は用紙に小さく、なまえ・とし・ねつ・せき・などを見出

しを書き、その下に書きこんでいく。熱は六度五分といわれて「6ごぶ」と書いている。「ぶ」の字がわからなくて隣のY子に尋ねる。「ふにてんやんか」と教える。数名が順を待って、つぎつぎにカルテを作ってもらっている。I子とF子が交替する。I子「はじめの方の方は、そういってください」「あなたは、どこが悪いんですか」「予防注射の方ですか」「お熱のわからない方は、今はかってください」と、トライアングルの棒を渡したりして、とても張切って受付をしている。

ほかの幼児たちも、それにつられてか、列を乱すこともなく、整然と受付をすませて、注射を受けている。済んだものから、カルテに印をおしてもらってお金を払っていく。「今度くるときはこの紙をもってきてください」とY子がいつている。この用紙はカルテでもあり、診察券でもある。このようにして、乗物ごっこをしていたグループの幼児たちも、興味をもって注射を受け、入院する患者もできて、遊びが発展していった。

文字を書くことによって、遊びは現実化の方向へいく。この頃の幼児たちは、現実に近い遊びを発展させようという傾向を示す。このことが、文字を使用することによってかなえられた、とみるべきであろう。だから、ごっこが現実化の方向をたどる度合いによって、コミュニケーションとしての文字の必要性の意義が、異ってくるのではないかと思う。

文字は読めるが文はわからない

一月十日 お正月をすぎると文字に対する興味や関心が一段と深められるように思う。かるたとりをみていると、句調がいいので、文句をおぼえこんでいるのか、皆がよく読めるように思われる。しかし、まだ文字は読めても、文は読めない幼児が多い。一字一字拾い読みをしている姿をよくみかける。朝、持物を整理したH子たちは、早速数名でかるたとりをはじめた。I子が読み札を読む。I子は前から文字の読み書きができるので、とても歯切れよく読んでいく。「はいありました」とスムーズに進む。

二回目はM夫が読む。M夫はまだ続けては読めない。一字ずつ拾い読みをしているので、二、三字読むと「はい、とりました」といわれてしまう。そこで、五、六枚してから、「もう面倒くさい、一つだけ読むわ」「き」「け」などと、頭文字だけ読んでいく。S夫は、まだ自分の名前の他に五字位しか読めないのので、絵をみてとっている。よく似た絵があればすぐ手をだすので、「ちがいます。お手つきです。一枚だしてください」と注意されている。「だってぼく字が読めないんだもの」といっているが、いつも、かるたのりの仲間に入っている。この頃になると、大部分の幼児は字が読めるようになるが、文を読むことは困難である。しかし、文字に対する興味は一段と増してくる。

興味をもって文字を書くが筆順や書きあやまりが多い

一月十四日 お正月にもらった年賀状をもちより、友だちとみせあったり、部屋に掲示したりする。「みんなで、ゆうびんやさんごっこをしましょうか」と話しかけてみると、「しよう、しよう」と大賛成である。

絵本や紙芝居をみながら、郵便局の仕事や、手紙の届く順序を話合う。それぞれ希望の役割をいったり、ポストを作ったりして準備が進められる。役になるよりも、字を書きたくしてしまうのが数名の幼児は、「先生もう書いてもいいでしょ」といって早速書きはじめる。級の約半数位は、「あけましておめでとう」の字が書ける。字に興味をもちはじめたM子は、ときどき尋ねながらも宛名が書けた。

しかし、まだお話を書くのはむずかしいと思ったのか、「絵はがきにしておくの」といって、サインペンでお花の絵を書いた。自分の名前しか書けない幼児は七名で、友だちや、教師に宛名を書いてもらっては、うれしそうにポストへ入れている。宛名の下に、くんとか、さんなどが書いてなくて、配るとき、どちらが差出人かわからないことがある。字を書くことに興味のある幼児は、何枚でも書いている。

文字の書きあやまりは、「は」「く」「よ」「や」「き」「し」

